

華東理工大学出版社『簡明日本語古文教程』にみる 日本語学習者のための古典日本語文法テキストの課題

春 口 淳 一

从华东理工大学出版社出版的《简明日语古文教程》来看 针对日语学习者的古典日语语法教材中的问题

HARUGUCHI Junichi

Abstract

《简明日语古文教程》是为了在大学的日语专业学生而编写的古典日语教育的教材。在本研究中，涉及了这本教材中关于古典日语语法的章节，其中又特别侧重于对助动词使用方法的解释。从中可发现例句少并且包含尚未学过的知识点，以及没有现代文的解释和对文化社会背景的解说等问题。引用例文一方面是为了减轻学习者的负担，另一方面是为了促进对学习内容的理解，所以说考虑到以上两点，著者对例文的引用应加以深思熟虑。

1. はじめに — 先行研究と本稿の研究目的

高等教育における日本語教育では、現代の日本語文法に限らず古典文法（以下、古典日本語文法）もまた教科として取り上げられることがある。特に中国においては数多くの大学で開講されている。例えば復旦大学（湯 1989）、北京第二外語学院（鈴木 1991）、華僑大学（間・岡崎 2003）のカリキュラムにその存在を見出すことができる。長崎外国語大学（以下、本学）の協定校の中でも、吉林大学、厦門大学、首都師範大学、台湾の淡江大学など、その例を挙げるのに事欠かない。これら協定校からの要望に応え、2008年度からは本学でも短期留学生を対象とする「古典日本語文法」を開講している。受講生は50名を超える時もあり、出身国・地域もアメリカ、韓国、中国、台湾と多岐に渡る。さらに中国の高等日本語教育においては、大学院の入学試験や中国大学日本語専攻八級試験などでの出題もみられる。少なくとも古典日本語文法が、中国の日本語教育では習得を期待される一項目であることは間違いないだろう。

ところが中国の高等教育機関において、日本語教育プログラムの一つとして確かに存在するにもかかわらず、古典日本語文法の扱いは低い。中国の「教育現場の教育行為を規定する教育指針（修 2004）」である『教学大綱』における古典日本語文法教育に関する記述は、教科の1つとして挙げられるのみである。何を、どこまで、どのように教えるのか、語られることはない。

1.1 先行研究

非母語話者向けの古典日本語文法教育を対象とした先行研究としては立松（2000）、金山（2004）が挙げられる。しかし、これらはおよそ授業報告として位置づけられるものであり、教壇に立つ者を支援する実証的な研究は数少ない。古典日本語文法が軽んじられる何よりの証左であろう。

このような状況下において、春口（2006）ではアンケート調査を基に、学習者のモチベーションを高めるための試みを取りまとめ、その結果を基に、文法項目の定着に擬古文（教師の自作による例

文)が有効であることを提唱した。また春口(2007)では、古典日本語を現代語訳する際にみられるミステイクを分類・分析し、現代日本語能力が古典日本語の学習に密接に関わっていることを指摘した。さらに春口(2008a)は学習者が持つ古典日本語文法観と彼らに要求される知識とを分析し、両者のギャップを明らかにした。

一方、春口(2008b)が分析の対象としたのは、学習のプロセスを支えるテキスト(武漢大学出版社『日本語古典文法』⁽¹⁾)である。非母語話者が学習の拠り所とするテキストはいったいどのようなものか、助動詞に着目して問題点を探った。結果、日本語非母語話者を対象としていてもそれへの配慮は見られず、学習者の理解促進、モチベーション向上の点から、日本語非母語話者のために古典日本語文法テキストが留意すべき事項を取りまとめるに至った。なお、春口(2008b)に類似した研究には、『日本語古典語法』⁽²⁾を対象とした春口(2009)、『日本古典文法』⁽³⁾を対象とした春口(2010)がある。

1.2 研究目的

本稿では、他の教科書も『日本語古典文法』と同様であるのか追従研究を行うことを目的の主とする。春口(2008b)同様、分析の対象項目は助動詞とするが、これは春口(2007)でミステイクの最大の要因の一つとして助動詞が挙げられたこと、また春口(2008a)でも試験問題中の最頻出項目として助動詞が取り上げられたことを背景とする。

そのため、本稿の掲げる研究課題もまた、春口(2008b)に準じる。すなわち、

- ・ 中国で出版される古典日本語文法のテキストは、助動詞をどのように提示するのか。
- ・ 使用例文等が、対象が非母語話者であることへの配慮がなされているのか。

この2点の解明を主として課題とし、分析を進める。またこれにあたって同じく教科書分析を行った春口(2008a)との比較しながら、その特徴を明らかにしていく。

2. 調査対象とその概要

今回、調査の対象として華東理工大学出版社『簡明日本語古文教程』(以下、『簡明』)を取り上げた。このテキストは梁海燕氏の編により、2006年に出版されている。その前言には「本书是日语古文基础课程编写的大学日语专业教材，以帮助学习者有限的课程时间内迅速掌握日语古文法框架，提高古文阅读能力。」とあり、日本語非母語話者を対象としたテキストであること、大学の日本語専修課程のためのテキストであること、速やかな古典日本語の理解を目指した簡便なテキストであること、古文の読解能力の向上を目指したテキストであることが汲み取れる。

調査方法としては、まず助動詞をどう扱っているのか、テキストの構成を概観する(第3章「テキスト構成」)。次に、各助動詞を導入する際に用いられる例文を取り上げ、どのような例文をいくつ学習者に提示しているのか、例文の出典に特徴はあるのか明らかにしたい(第4章『簡明』の提示する例文)。さらに、『簡明』で扱う例文が日本語学習者にとって適当であるのか、春口(2008b)の結果を踏まえながらその特徴について言及する(第5章「考察」)。『日本語古典文法』と比較した上で、『簡明』が持つ非母語話者対象の古典日本語文法テキストとしてどのような特徴を持つか明らかにしていきたい。

3. テキスト構成

『簡明』は「古典文法篇」と「練習問題篇」、そして「古典読本篇」の三部構成となっており、助動詞は「古典文法篇」第5章で紹介している。なお、本文に中国語は全く用いられておらず、このテキストが学習者に対して高い現代日本語の読解力を求めているのだと言えよう。

まず「一 助動詞の分類」で活用の型、接続、意味によって助動詞を分類し、それぞれまとめて提示している。そして、「二 助動詞の種類」で具体的に助動詞を一つ一つ取り上げて説明している。このような助動詞紹介の構成は、『日本語古典文法』とほぼ同じである。

「二 助動詞の種類」における助動詞の提出順は、「一 助動詞の分類」の中の意味による分類を踏襲している。表1に示す。

表1：助動詞の提出順

(1) 時の助動詞	① 過去・・・・・・・・・・き、けり ② 完了Ⅰ・・・・・・・・・・つ、ぬ ③ 完了Ⅱ・・・・・・・・・・たり、り
(2) 推量の助動詞	① 推量・意志・・・・・・・・・・む、べし ② 現在推量・過去推量・・・・・・・・らむ、けむ ③ 推定・婉曲・・・・・・・・・・らし、めり ④ 半実仮想・・・・・・・・・・まし
(3) 打消の助動詞・・・・・・・・・・	ず
(4) 打消推量の助動詞・・・・・・・・・・	じ、まじ
(5) 断定の助動詞・・・・・・・・・・	なり、たり
(6) 伝聞・推定の助動詞・・・・・・・・・・	なり
(7) 受身・尊敬・可能・自発の助動詞・・・・・・・・・・	る、らる
(8) 使役・尊敬の助動詞・・・・・・・・・・	す、さす、しむ
(9) 願望の助動詞・・・・・・・・・・	たし、まほし
(10) 推量の助動詞	① 推量・意志・・・・・・・・・・む、べし ② 現在推量・過去推量・・・・・・・・らむ、けむ ③ 推定・婉曲・・・・・・・・・・らし、めり ④ 半実仮想・・・・・・・・・・まし
(11) 打消の助動詞・・・・・・・・・・	ず
(12) 比況の助動詞・・・・・・・・・・	ごとし

上代の助動詞を扱っていない点が『日本語古典文法』との大きな違いである。また各助動詞はそれぞれの項の中で、接続、活用、意味の順に紹介している。意味の紹介では、例文とその出典は示すものの、『日本語古典文法』と違い現代語訳を載せていない。

一方、いくつかの助動詞に補足事項を設けた点は『日本語古典文法』との共通点である。補足事項とは、例えば分類上同じ意味として括られた助動詞の違いを示したり、表記上は一致、あるいは類似するものとの識別をする際の手掛かりを紹介したりするものである。

4. 『簡明』の提示する例文

4.1 例文数

『簡明』にみられる助動詞、学習項目ごとの例文数を表にまとめた（次頁、表2）。29の助動詞、のべ45の学習項目に、計70の例文が用いられている。

ここでは導入目的に用いられた助動詞に限定しており、補足の項目で紹介された例文は除いている。ただし「ごとし」の補足扱いで提示された「ごとく」「やうに」の例文は、関連する助動詞の導入として用いられていることから、表2に含めた。合計すると70例であり、『日本語古典文法』の76例と大差ない。『簡明』が上代の助動詞を欠くこと（次節「出典」参照）を考えれば、ほぼ同数と行ってよいだろう。

また、原則として助動詞の学習項目ごとに1例ずつ例文は紹介されている。このことも『日本語古典文法』と共通している。例えば「じ」では「打消推量」、「打消意志」という学習項目があって、それぞれ1例を導入のために紹介している。例文数が2例となった助動詞「たり・り」を例に挙げると、学習項目「完了」は「たり」も「り」も1文ずつ紹介され、例文数は合計で2例となる。実際、2例挙げられたのは助動詞「き」の「過去」、助動詞「む」の「適当・勧誘・丁寧な命令」、助動詞「べし」の「適当・勧誘・命令」、助動詞「ず」の「打消」、助動詞「なり・たり」の「断定」、助動詞「なり」の「伝聞」「推定」、助動詞「ごとし」の「比況」と、8項目に限定される。

表2：例文数

助動詞	学習項目	例文数	助動詞	学習項目	例文数
き	過去	2	らし	推定	1
けり	過去	1	めり	婉曲・推量	1
	詠嘆	1	まし	反実仮想	1
つ・ぬ	完了	2		意志・希望	1
	強意	2	ず	打消	2
たり・り	完了	2	じ	打消推量	1
	存続	2		打消意志	1
む	推量	1		打消当然・禁止	1
	意志・希望	1		不可能な推量	1
	適当・勧誘・丁寧な命令	2	なり・たり	断定	4
	仮定・婉曲	1	なり	伝聞	2
むず	推量	1		推定	2
べし	推量	1	る・らる	受身	2
	意志・決意	1		尊敬	2
	適当・勧誘・命令	2		可能	2
	可能	1		自発	2
らむ	現在推量	1	す・さす・しむ	使役	3
	現在の原因推量	1		尊敬	3
	現在の伝聞	1	たし・まほし	願望	2
	現在の婉曲	1	ごとし	比況	2
けむ	過去推量	1		例示	1
	過去の原因推量	1	(ごとくに・やうに)	比況	2
	過去の伝聞	1			
	過去の婉曲	1			

4.2 出典

例文はいずれも、古典文学作品から抽出したものである。表3に時代、出典作品名と例文の数をまとめた(次頁)。こちらは補足のための項で取り上げられた例文も含んでいる。

出典は全部で18作品に分けられ、中古から44例、中世から29例となった(4例は出典未記入)。上代の作品、また近世以降の作品がなく、中古(平安時代)、中世(鎌倉・室町時代)に二分できる。このことは『日本語古典文法』に『万葉集』(上代)を出典とする例文が紹介されていたことと異なる。中古文学が比率の上では高いが、最頻出が『徒然草』(24例)であったことは『日本語古典文法』でもみられた特徴である。

表3：例文の出典

時代	出典作品名	例文数	時代	出典作品名	例文数	時代	出典作品名	例文数
中古	和泉式部日記	1	中古	更級日記	8	中古	大和物語	1
中古	伊勢物語	5	中古	竹取物語	9	中世	太平記	1
中古	宇治拾遺物語	1	中古	堤中納言物語	2	中世	徒然草	24
中古	宇津保物語	1	中古	土佐日記	3	中世	平家物語	2
中古	古今集	4	中古	浜松中納言物語	1	中世	保元物語	1
中古	今昔物語集	1	中古	枕草子	7	中世	方丈記	1
							出典不明（自作？）	4

5. 考察 — 使用例文に見られる問題の検証

春口（2008b）で取り上げた『日本語古典文法』の問題は、次の5つにまとめられる。

1. 導入のための例文としては学習項目ごとに1例ずつであり、非常に少ない。
2. 出典が中古・中世に偏っており、近世や近代を欠く。
3. 上代のみで用いられた助動詞など、汎用性の低い特殊な文法項目を紹介している。
4. 表記にミスがある。
5. 未習の学習項目を例文に含まれる。

『簡明』にもこのような問題が見られたのであろうか。あるいは『日本語古典文法』とは異なる問題を含んでいるのであろうか。

1) 学習項目と例文数

前述の通り、『日本語古典文法』もまた1項目につき、1例のみを挙げている。学習者が、複数の例文に見られる共通点から帰納的に推測することは不可能である。使用方法と意味とを確認することもままならない。

2) 例文出典の時代配分

こちらも前章で述べたが、「中古・中世に偏っており、近世や近代を欠く」という点は『日本語古典文法』と共通している。しかし、上代の作品がないため、むしろ中古・中世に集中しているということもできる。

3) 特殊な文法項目

上代の文学作品から例文を抽出してはならず、そのため上代に限って使われた特殊な助動詞は、『簡明』には見られない。『日本語古典文法』に「ゆ」「らゆ」「す」「ふ」「ましじ」が扱われていたのとは大きな違いである。

4) 表記のミス

『日本語古典文法』では、次のような表記上のミスが散見された。

例1 我が命のあらむかぎりは、とぶらひ奉たてまつるべし（下線は筆者）

例1は下線部を「奉るべし」とすべきところを、書き誤ったものであろう。ケアレスミスだが、情報が限られる海外で用いられるテキストとしては、学習者を（あるいは教師も）混乱させかねない深刻な誤りである。しかし『簡明』で紹介された71例には、同様のミスは見られなかった。

5) 未習項目の使用

未習項目を例文中に使用する点は『日本語古典文法』に数多く確認できたが、『簡明』でもこれは確認された。次の例2は過去の助動詞「き」を紹介するための例文だが、未出の完了の助動詞「たり」が含まれている。同様に例3も完了の助動詞「ぬ」を紹介するための例文に、推量の助動詞の「べし」が未出であるにも関わらず、用いられている。このような例は、助動詞に限ってさえ8例見られた。

例2 いとうやうやく言ひたりしこそ、いみじく覚えしか。⁽⁴⁾

例3 清見が関の波も高くなりぬべし。

また『簡明』では、助動詞を「古典文法篇」第5章で紹介しているが（「3. テキスト構成」参照）、助詞は第6章で、副詞は第7章で扱われている。以下に挙げた例4は、助動詞「まじ」導入のためのものであるが、接続助詞の「ば」が用いられているほか、副詞「え」との呼応の表現方法も含まれている。「おはします」という敬語表現まで使われていることを考えると、例文としては甚だ不適當である。この問題は春口（2008b）では取り上げなかったが、『日本語古典文法』にもみられる。

例4 「かぐや姫は重き病をしまへば、え出でおはしますまじ。」

6) その他 - 現代語訳

『簡明』では、古典文学作品の中からその助動詞が使用されている例文を1文、抜き出して載せている。このとき、学習項目ごとに該当する助動詞を太字で明示しているが、この他には現代語訳も、文章の背景説明を一切なされていない。実例をただ見せるのみとなっている。これは、何よりも大きな問題である。

7) その他 - 背景の解説

現代語訳のほかにも、文学作品から抽出された例文の場合、背景となる文化や社会についての解説を欠いたままでは、理解することが難しいことが多い。例5では妻戸というものがなんであるか解説がなければ、その情景を浮かべることが難しく、「なり」の意味を理解する上で不適當である。

例5 妻戸を、やはら、かい放つ音すなり。

8) その他 – 韻文の使用

韻文による例文提示はのべ6例（重複する和歌が1首）ある。この中には枕詞や掛詞など、和歌にみられる特殊用法が含まれるものもある。しかし解説が用意されていないため、学習者は混乱することだろう。文法理解のための例文として、果たして適当であるだろうか。

例6 風吹けば 沖つ白波 たつた山 夜半にや君が 一人越ゆらむ

この例6は助動詞「らむ」を理解させるために用意された例文であり、『伊勢物語』を出典とする和歌であるが、第3句に「たつた山」に「波が立つ」と「立田山」の二つの意が掛けられた掛詞を含む。既にみたように例文に現代語訳が付かず、さらに特殊用法の解説さえ欠いていたのでは、全く例文としての役割が果たせないだろう。

6. まとめ

『簡明』が、(1) 上代の助動詞は扱わない、(2) 例文の出典が中古・中世の文学作品に限定される点は、『日本語古典文法』よりも入門書として適当である。また、(3) 表記上のミスが見られないことは当然のことではあるが、『日本語古典文法』と比して評価される点である。しかし、(4) 例文数が少なく、(5) 例文に未習項目が含まれることは、『日本語古典文法』同様に改善が求められる点である。また(6) 古典文学作品から抽出した例文に、まったく現代語訳を付していない点、(7) またその例文の文化的、社会的背景にまったく補足説明が見られない点は、『日本語古典文法』にはみられなかった深刻な問題であり、入門書としてはもちろん、教師用参考書としてさえ不適當である。(6)と(7)に関しては、その例文として和歌を使用したとき、さらに学習者にとっては負担となるだろう。

『日本語古典文法』もそうであったが、『簡明』もまた対象が日本語非母語話者であることを留意し、改善すべき点が多い。特に、例文の質と量、その取り扱いには手を加えるべき余地が多く残されている。大学で日本語を専攻とする学生が古典日本語文法を学ぶ際、極力その負担を軽減し、かつ学習項目の理解を促進させるような工夫が古典日本語文法のテキストには求められる。

注

- (1) 王雪松編 (2005) 『日本語古典文法』 武漢大学出版社
- (2) 鉄軍編 (2006) 『日語古典語法』 北京大学出版社
- (3) 崔香蘭編 (2006) 『日本古典文法』 大連理工大学出版社
- (4) 例文中の太字は学習項目を表している (原文ママ)

※ 本稿は、2009年5月30日に宮崎大学で開催された日本語教育学会研究集会での研究発表を基に加筆・修正したものである。

参考文献

- 金山泰子(2004)「上級学習者のための文語文法入門」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』27、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター、41 - 62 頁
- 立松喜久子(2000)「文語文法を教える 外国人上級者のための古典入門授業」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』23、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター、1 - 24 頁
- 春口淳一(2006)「非母語話者を対象とした古典文法授業の実践報告 - 学習者のモチベーション向上を目指した取り組み-」『中国日語教育理論与实践研究』吉林大学出版、56 - 66 頁
- 春口淳一(2007)「非母語話者が古典日本語文法を学習する際の問題点 - 現代日本語訳におけるミステイク分析から-」『長崎外大論叢』11、長崎外国語大学・長崎外国語短期大学、109 - 122 頁
- 春口淳一(2008a)「日本語学習者と古典日本語文法 - 学習者が求めるもの・学習者に求められるもの-」2008年度日本語教育学会第2回研究集会発表資料
- 春口淳一(2008b)「日本語学習者を対象とする古典日本語文法テキストの課題 - 武漢大学出版社『日本語古典文法』を例として-」『長崎外大論叢』12、長崎外国語大学・長崎外国語短期大学、71 - 84 頁
- 春口淳一(2009)「日本語学習者を対象とする古典日本語文法テキストの課題(3) - 北京大学出版社『日語古典語法』を例として-」『長崎外大論叢』13、長崎外国語大学・長崎外国語短期大学、131 - 144 頁
- 春口淳一(2010)「日本語学習者を対象とする古典日本語文法テキストの課題(4) - 大連理工大学出版社『日本古典文法』を例として-」2010年度日本語教育学会第2回研究集会発表資料

資料

出典についてはテキストに提示されておらず筆者が調べて明らかとなったものについては()付きで、調べても明らかにならなかったものは(出典不明)と記した。また備考欄に「訳有」としたのは現代語訳が付されたものを、「一部訳有」は文全体ではなく部分的に現代語訳が併記されていたものを表す。「二回目」は繰り返し用いられた例文を表す。なお、例文中の太字はテキストのままであるが、これは学習項目が何であることを表している(注4)。

助動詞	意味	例文	出典	備考
き	過去	死にし子、顔よかりき。	土佐日記	
き	過去	いとうやうやしく言ひたりしこそ、いみじく覚えしか。	徒然草	
けり	過去	昔、男ありけり。東の五条わたりにいと忍びていきけり。	伊勢物語	
けり	詠嘆	「あさましう、犬なども、かかる心あるものなりけり。」 と笑はせたまふ。	枕草子	

助動詞	意味	例文	出典	備考
「き」と「けり」の違い		その人ほどなく失せにけりと聞きはべりし。	徒然草	訳有
つ・ぬ	完了	秋田、なよ竹のかぐや姫とつけつ。	竹取物語	
つ・ぬ	完了	暮れぬれば参りぬ。	枕草子	
つ・ぬ	強意	「わが弓の力は、龍あらば、ふと射殺して、頸の玉は取りてむ。」	竹取物語	
つ・ぬ	強意	清見が関の波も高くなりぬべし。	更科日記	
「つ」と「ぬ」の違い		年ごろ、よくくらべつる人々なむ、別れがたく思ひて、日しきりに、とかくしつ、ののしるうちに夜更けぬ。	土佐日記	訳有
「ぬ」の識別		歌詠まぬ人なり。	(出典不明)	
「ぬ」の識別		かくなりぬらむ。	(出典不明)	
「ぬ」の識別		人起きぬときはいかんせん。	(出典不明)	
「ぬ」の識別		日暮れぬ。	(出典不明)	
たり・り	完了	「われ、物握りたり。今は下ろしてよ。」	竹取物語	
たり・り	完了	やまと歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける。	古今集	
たり・り	存続	その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。	伊勢物語	
たり・り	存続	五月のつごもりに、雪いと白う降りり。	伊勢物語	
む	推量	これを待つ間、何の楽しみかあらむ。	徒然草	
む	意志・希望	「こよひは、ここに候はむ。」	(伊勢物語)	
む	適当・勧誘・丁寧な命令	子といふものなくてありなむ。	徒然草	
む	適当・勧誘・丁寧な命令	「などかくは急ぎたまふ。花を見てこそ帰りたまはめ。」	宇津保物語	
む	仮定・婉曲	心あらむ友もがな。	徒然草	
「むず」について		「もとの国より迎へに人びとまうて来むず。…」	竹取物語	訳有
べし	推量	このいましめ、万事にわたるべし。	徒然草	
べし	意志・決意	毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。	徒然草	
べし	適当・勧誘・命令	東のかたに、住むべき国求めにとてゆきけり。	伊勢物語	
べし	適当・勧誘・命令	かならずこのたびの御遊びに参るべし。	宇治拾遺物語	
べし	当然・義務	「子となりたまふべき人なめり。」	竹取物語	

助動詞	意味	例文	出典	備考
べし	可能	日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。	枕草子	
「む」と「べし」の違い		命ありて、この世にまた帰るやうもあらむ。	源氏物語	訳有
「む」と「べし」の違い		この人々の深き心ざしは、この海にも劣らざるべし。	土佐日記	訳有
らむ	現在推量	風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君が一人超ゆるむ	伊勢物語	
らむ	現在の原因推量	冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ	古今集	
らむ	現在の伝聞	(鷺は)「ゆるぎの森にひとり寝じ。」と争ふらむ、をかし。	枕草子	
らむ	現在の婉曲	これをかなしと思ふらむは、親なればぞかしとあわれなり。	枕草子	
けむ	過去推量	これを聞きけむ人、いかに憎み笑ひけむ。	今昔物語	
けむ	過去の原因推量	徳大寺にもいかなるゆゑか侍りけむ。	徒然草	
けむ	過去の伝聞	増賀ひじりの言ひけむやうに、……。	徒然草	
けむ	過去の婉曲	さし入りて対ひるたりけむ有様、さこそ異様なりけめ。	徒然草	
「らむ」「けむ」の連体形の用法		鸚鵡、いとあはれなり。人の言ふらむことをまねぶらむよ。	枕草子	訳有
「らむ」「けむ」の連体形の用法		風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君が一人越ゆるむ	(伊勢物語)	一部訳有 二回目
「らむ」「けむ」の連体形の用法		これを聞きけむ人、いかに憎み笑ひけむ。	(伊勢物語)	一部訳有
らし	推定	この川にもみぢ葉流る奥山の雪げの水ぞ今まさるらし	古今集	
めり	婉曲・推量	ことにかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし。」などは言ふめる。	徒然草	
まし	反実仮想	「我なからましかば、この姫君、いかにわびしう、いとおおぼえたまばまし。」	浜松中納言物語	
まし	意志・希望	いかに言ひ何にたとへて語らまし秋のゆふべの住吉の浦	更科日記	
ず	打消	都の内とも見えぬ所のさまなり。	更科日記	
ず	打消	この川、飛鳥川にあらねば、淵瀬さらに変はらざりけり。	土佐日記	
じ	打消推量	「月ばかりおもしろきものはあらじ。」	徒然草	
じ	打消意志	「勝たむとうつべからず。負けじとうつべきなり。」	徒然草	
まじ	打消推量	「あはれなりつる心のほどなむ、忘れむ世あるまじき。」	更科日記	
まじ	打消意志	「ただ今は見るまじとて入りぬ。」	枕草子	

助動詞	意味	例文	出典	備考
まじ	打消当然 ・禁止	妻といふものこそ男のもつまじきものなれ。	徒然草	
まじ	不可能な 推量	「かぐや姫は重き病をしたまへば、え出でおはしますまじ。」	竹取物語	
なり・た り	断定	秋の月は限りなくめでたきものなり	徒然草	
なり・た り	断定	ただ物をのみ見むとするなるべし	徒然草	
なり・た り	断定	人の門たたき走りありきて、何事にかあらむ、……。	徒然草	
なり・た り	断定	清盛、嫡男たるによって、その跡をつぐ。	平家物語	
存在の「なる」		壺なる御薬たてまつれ。	竹取物語	訳有
なり	伝聞	「蝶はとらふれば、われは病せさすなり。あなゆゆしもゆゆし。」	堤中納言 物語	
なり	伝聞	「いと心苦しくもの思ふなるは、まことか。」と仰せたまふ。	竹取物語	
なり	推定	妻戸を、やはら、かい放つ音すなり。	堤中納言 物語	
なり	推定	秋風に初かりがねぞ聞こゆるたが玉づさをかけて来つらむ	古今集	
断定と伝聞・推定の「な り」		男もすなる日記といふものを、女もして見むとするなり。	土佐日記	訳有
る・らる	受身	舎人が、寝たる足を狐に食はる。	徒然草	
る・らる	受身	これに教へらるるもをかし。	枕草子	
る・らる	尊敬	大将いとま申して、福原へこそ帰られけれ。	平家物語	
る・らる	尊敬	無下のことをも仰せらるるものかな。	徒然草	
る・らる	可能	(足鼎を) 抜かむとするに、おほかた抜かれず。	徒然草	二回目
る・らる	可能	夜一夜寝られず。	大和物語	
る・らる	自発	人知れずうち泣かれぬ。	更科日記	
る・らる	自発	ふるさと限りなく思ひ出でらる。	更科日記	
「る」の識別		道知れる人もなくて、まどひ行きけり。	伊勢物語	
「る」の識別		冬はいかなる所にも住まる。	徒然草	
す・さす ・しむ	使役	「いま一かへり、われに言ひて聞かせよ。」	更科日記	
す・さす ・しむ	使役	名を三室戸齋部の秋田を呼びてつけさす。	竹取物語	
す・さす ・しむ	使役	我負けて人を喜ばしめむと思はば、さらに遊びの興なかるべし。	徒然草	

助動詞	意味	例文	出典	備考
す・さす ・しむ	尊敬	「何に見えたるぞと重ねて問はせたまはばいかがが申さむ。」	(徒然草)	
す・さす ・しむ	尊敬	(宮は) 夜深く出でさせたまひぬ。	和泉式部 日記	
す・さす ・しむ	尊敬	男どもの中に交じりて、夜を昼になして取らしめたまふ。	竹取物語	
たし・ まほし	願望	帰りたければ、ひとりつい立ちて行きけり。	徒然草	
たし・ まほし	願望	いかなる人なりけむ、尋ね聞かまほし。	徒然草	
ごとし	比況	小を捨て大につくがごとし。	徒然草	
ごとし	比況	昨日のごとし。	土佐日記	
ごとし	例示	和歌・管弦・往生要集ごとき抄物を入れたり。	方丈記	
「ごとなり・やうなり」		そぞろに神のごとくに言へども、道知れる人はさらに信をも起こさず。	徒然草	訳有
「ごとなり・やうなり」		浮舟の女君のやうにこそあらめ。	更科日記	訳有

